

1. ワークショップの概要

1.1 第7回ワークショップ

第7回ワークショップの概要は表1に示すとおりであり、主な議事を表2に示した。

第7回ワークショップでの議題は、最終の結果報告およびとりまとめ・考察についての確認であり、主な指摘事項は以下のとおりであった。

- ・整備後に確認された外来種のアズマヒキガエル、ツチガエルの駆除は生息数が少ないうちが効果的である。市民協働で駆除することも考えると良い。
- ・ブッシュゾーンは、人が立ち入れる箇所と、立ち入れない箇所の区分が必要である。
- ・公園の積極利用を働きかける際には、歴史的な背景なども関連付けると良い。

表1 第7回常磐公園自然環境調査ワークショップの概要

| |
|---|
| 日時:平成29年12月7日(木) 18:00~19:40 |
| 場所:旭川市第3庁舎土木部第4会議室 |
| 出席者: |
| ◆有識者 |
| 塩田 惇(あさひかわ自然共生ネットワーク)、出羽 寛(あさひかわ自然共生ネットワーク)、 寺島 一男(あさひかわ自然共生ネットワーク)、南 尚貴(旭川市科学館) |
| ◆業務受託者 |
| 前田 敬(管理技術者)、舟口 義臣(担当者) |
| ◆事務局 |
| 斉藤 郁生(土木部公園みどり課)、水野 雅博(土木部公園みどり課) 山崎 正太(土木部公園みどり課)、大窪 俊英(土木部公園みどり課) |
| 配付資料: |
| ・第7回ワークショップ議事次第(A4 1頁) |
| ・常磐公園自然環境調査 第7回ワークショップ資料 調査結果総括(案) (A3 75頁) |
| ・常磐公園自然環境調査 第7回ワークショップ資料 調査結果総括(案) 資料編 (A3 60頁) |

表 2(1) 第 7 回常磐公園自然環境調査ワークショップにおける主な議事

懇談会の概要

●昆虫類調査結果報告及び常磐公園自然環境調査結果の総括

受託者の株式会社建設技術研究所より、整備後の昆虫類調査の結果報告、前回ワークショップでの意見を参考に追加又は修正した事項及び昆虫類調査時に確認されたアズマヒキガエルについての説明を行い、有識者及び事務局と意見交換を行った。

(1)植物調査

- ・植物相調査結果の外来種数の割合について、植栽種と外来種を分けて表記した(受託者)。
- ・吹付け法面の帰化率及び積算被覆率の図表に、シロツメクサの被覆率を明示し、外来種の比率のうちシロツメクサが占める割合について確認できるようにした(受託者)。

(2)鳥類調査

- ・整備前調査、整備後調査の両方調査を実施している月のみの結果を用いて、確認種数について整理すると、全体で 61 種が確認され、そのうち 33 種が整備前後の両方で確認されている(受託者)。
 - 確認種数の図で全体種数が 61 種と記載され、生活区分の種数が 62 種となっているが、どちらが正しいのか(有識者)。
 - 生活区分の表はカワラバトを入れて算出していると思われる。生活区分の表の内訳も含め確認する(受託者)。
- ・常磐公園内で一般的にみられる種の約半数が、公園内で整備前、整備後の両方で繁殖が確認され、主な利用種については安定した生息状況であることが確認された(受託者)。

(3)両生類・爬虫類・哺乳類調査

- ・昆虫類調査時に、アズマヒキガエルの成体をブッシュゾーンで1個体確認した(受託者)。
- ・現在の旭川市内のアズマヒキガエルの分布は把握されているか(受託者)。
 - アズマヒキガエルは石狩川より侵入しており旭川市内に広がり始めている。過去に忠別川の大正橋付近に放した事例もあり、それが常磐公園に入った可能性も考えられる。今のうちに駆除が必要である(有識者)。
- ・ツチガエルはどこで確認されたのか(有識者)。
 - 鳴声は上川神社付近の池で多数確認された。成体の確認は、千鳥ヶ池スイレン繁茂部である。(受託者)。
- ・公園内の池に魚を放流しているか。また、産地はどこか(有識者)。
 - キンギョを毎年 100 尾単位で放流しているが、産地は不明である(事務局)。
 - キンギョの放流時に外来種が紛れこんでいる可能性もある。放流時には留意する必要がある(有識者)。
- ・整備前、整備後の両生類・爬虫類・哺乳類確認状況の表に、コウモリの確認状況も入れておくこと(有識者)。
 - 了解した(受託者)。
- ・整備前のコウモリ類確認位置の図で、ヤマコウモリがヒナコウモリと誤って記載されているので修正すること(有識者)。
 - 修正する(受託者)。

(4)昆虫類調査

- ・整備前と比べ昆虫類の確認種数が減少しているのは、調査回数も影響していると考えられるが、他に要因はあるか(有識者)。
 - 整備前調査と同時期に設定していた整備後夏季調査時の気温が低かったことが、要因の 1 つと考えられる。また、公園内の除草等の管理状況も影響していると考えられる(受託者)。
- ・環境指標性が高いオサムシ科のベイトトラップ法による採集結果を見ると、整備実施箇所である Kn-2 における確認種数は、整備前 8 種、整備後 14 種と確認種数が増加している(受託者)。
- ・昆虫類調査は、調査回数を増やすか長期的に調査を行わないと結果の評価は難しい(有識者)。

(6)微気象調査

- ・公園内の風速の減衰率に着目して整理した結果、整備前、整備後の両方で公園内は風が河川敷より弱く、特に西向きの風は公園周辺の樹木により弱まる傾向が確認された(受託者)。
- ・整備前の静穏の区分が、風速 0.2m/s 以下ではなく、0.0m/s のみ集計している場合があるようなのでデータを確認すること(有識者)。
 - 確認する(受託者)。
- ・H29 夏の風向グラフのアメダスと、Ks-1 の風向が全く逆になっており、いずれかのデータが逆転している可能性があるため確認すること(有識者)。
 - 確認する(受託者)。

表 2(2) 第7回常磐公園自然環境調査ワークショップにおける主な議事

懇談会の概要

(7)総括

- 哺乳類の代表種にエゾアカネズミが記載されているが、公園内での生息状況は不明であるため、選定しないほうが良い。目標種として扱うのが良い(有識者)。
→了解した(受託者)。
- 鳥類生息環境の表において、ヒガラ、イスカの利用環境を針葉樹に修正すること。クマゲラについても針葉樹に加えておいたほうが良い(有識者)。
→了解した(受託者)。
- 林床植物の植被率が低いため、部分的に回復させる必要がある。全ての林床を管理する必要はない。ブッシュゾーンは、人が立ち入れる箇所と、立ち入れない箇所の区分が必要である(有識者)。
- 近隣地域との比較は、緑地面積も考慮した分析が必要である(有識者)。
- 周辺の代表的な緑地に、突哨山も追記すること(有識者)。
→了解した(受託者)。
- 外来種のアズマヒキガエル、ツチガエルについては生息数が少ないうちの駆除活動が効果的である。市民協働で駆除することも考えると良い(有識者)。
- 公園の積極利用を働きかける際には、歴史的な背景なども関連付けると良い(有識者)。